

英語学論文用の書式細則

改定 2023 年度細則第 1 号別紙第 1 (2023 年 4 月 26 日)

『日本英語英文学』の論文書式について、基本的には諸先生方が普段用いられているスタイルが尊重できるような緩やかなものを考えておりますが、全体の統一という観点から、また経費の節減という事情もございまして、以下の諸点を共通書式として定めております。以下、「投稿規程」と重複する部分もございまして、どうぞご了承下さい。

1. 書式、字体、枚数など

	英語論文	日本語論文
用紙・余白	<ul style="list-style-type: none"> MS Word で A4 判の用紙に作成 天地左右に 2.5 cm (1 インチ) の余白 1 ページに 25 行の設定 	<ul style="list-style-type: none"> 英語論文に同じ 横書き
字体・大きさ	<ul style="list-style-type: none"> 本文、注、参考文献のいずれも、字体は Century で、12 ポイントの活字を使用 	<ul style="list-style-type: none"> 本文、注、参考文献のいずれも、和文は MS 明朝、欧文は Century で、12 ポイントの活字を使用 句読点は、「、」「。」を使用
原稿の長さ	<ul style="list-style-type: none"> 論文、書評論文は 32 ページ以内 研究ノート、書評は 16 ページ以内 図表、注、参考文献もこのページ制限内に収める 	<ul style="list-style-type: none"> 英語論文に同じ
機種依存文字	<ul style="list-style-type: none"> 丸付き数字、全角ローマ数字、単位記号などを含め、機種依存文字は使用しない どうしても使用する必要がある場合には、事前に相談する 	<ul style="list-style-type: none"> 英語論文に同じ
英数字、丸カッコ、コンマ、コロン、セミコロン、ピリオド	<ul style="list-style-type: none"> 全て半角文字を使用 コンマ、コロン、セミコロンの後には半角 1 つ分のスペースを空ける。前にはスペースを空けない 省略符のピリオドの後には、半角 1 つ分のスペースを空ける。文末のピリオドの後には、半角 2 つ分のスペースを空けて次の英文を始める 丸カッコの前後には、半角 1 つ分のスペースを空ける <p>例：Brown (201:321) discusses ...</p>	<ul style="list-style-type: none"> 全て半角文字を使用 引用に於ける英文は、英語論文の書式に準じる コロンを用いた場合、その後ろには半角 1 つ分のスペースを空ける 日本語の地の文に於いては、カッコの前後にはスペースを空けない。但し、文献に言及する際は、出版年を示すカッコの前に半角 1 つ分のスペースを空ける。参考文献表でも同じ <p>例：鈴木 (2008:20) では……</p> <ul style="list-style-type: none"> 欧文と和文の境目には、スペースを空けない

		例：屈折(inflexion)には、活用(conjugation)と曲用(declension)の2種類がある。
一重カギカッコ(「 」)、二重カギカッコ(『 』)、ヤマカッコ(< >)、スミツキカッコ(【 】)、その他の特殊括弧	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的には使用しない ・どうしても使用する必要がある場合には、全角文字を使用 	<ul style="list-style-type: none"> ・全角文字を使用
原稿の1ページ目	<ul style="list-style-type: none"> ・論文の題目は、太字で中央揃え ・3文字以下の前置詞、接続詞、冠詞を除く全ての語頭を大文字にする(例：During, on, the, When) ・題目の下は、1行アケで本文を始める ・氏名、所属、謝辞などは記さない(これらは、表紙に記載) 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語論文に同じ
空行及びインデント	<ul style="list-style-type: none"> ・各節、注、参考文献、例文の前後には、空行を挿入する ・パラグラフの冒頭は、半角スペース5つ分のインデント 	<ul style="list-style-type: none"> ・各節、注、参考文献、例文の前後には、空行を挿入する ・段落の冒頭は、全角スペース1つ分の字下げ ・引用に於ける英文は、英語論文の書式に準じる
見出し番号	<ul style="list-style-type: none"> ・Introduction は、(0節からではなく)1. Introduction のように、1節から始める ・小節番号は、3.1. Strict Identity のように、数字の後にピリオドを置く 	<ul style="list-style-type: none"> ・「はじめに」或いは「序論」は、(0節からではなく)「1. はじめに」のように、1節から始める ・小節番号は、「3.1. 代案」のように、数字の後にピリオドを置く
米式・英式	<ul style="list-style-type: none"> ・綴りや punctuation の米式・英式は問わないが、原稿内に一貫性を保つ ・投稿に際しては、ネイティブ・スピーカーのチェックを事前に必ず受ける 	

2. 注、参考文献など

	英語論文	日本語論文
注 Notes	<ul style="list-style-type: none"> ・Notes は、References の前に入れる ・脚注形式ではなく、尾注形式とする ・本文と同じ書式で記載する ・注番号は、punctuation の後に入れる 	<ul style="list-style-type: none"> ・注は、参考文献の前に入れる ・脚注形式ではなく、尾注形式とする ・本文と同じ書式で記載する ・注番号は、句読点の前に入れる

	<ul style="list-style-type: none"> ・注番号は、カッコなどを付さず、上付き <p>例：In the process of debating,¹ we are able to learn logical thinking and critical thinking.²</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・注番号は、カッコなどを付さず、上付き <p>例：……と考えられる¹。しかし、Iwamoto (2015)では²、……</p>
<p>参照文献 References</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・References には、本文中に引用・言及した文献のみを記載する ・アルファベット順に並べる ・同一著者の場合、著者名を繰り返す ・共著の場合、&ではなく and を使用する ・雑誌は巻号、ページを明記する 	<ul style="list-style-type: none"> ・参照文献には、本文中に引用・言及した文献のみを記載する ・欧文、和文が混在する場合は、別々に分けずに、混在させてアルファベット順に並べる。和文のみの場合は、五十音順で並べる ・同一著者の場合、著者名を繰り返す ・共著の場合、中黒点（・）を使用する ・雑誌は、巻号、ページを明記する

3. 注と参照文献等の例

以下、注と参照文献等の例を示しておきます。なお、文献例は日本語文献を中心に挙げてあります。

注

1. 野村忠央(私信)によると、以下の例は……。
2. 藤田 (2006)にも指摘されている通り、……。
3. Kuno and Takami (1993)では(i)の反例として(ii)が挙げられている。
 - (i) *Pictures of himself_i don't portray John_i well.
 - (ii) To John_i's disgust, a story about himself_i in the Boston Globe portrayed him_i as a small-town politician.

(Kuno and Takami 1993: 157)

参照文献

〈単著・編著〉

Brinton, Laurel and Minoji Akimoto (eds.) (1999) *Collocation and Idiomatic Aspects of Composite Predicates in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins.

江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』(改訂3版) 東京: 金子書房.

Leech, Geoffrey (2004) *Meaning and the English Verb*, 3rd ed. London: Routledge.

永谷万里雄・清水和子・仙土真由美・松倉信幸・鈴木繁幸・木内修 編 (2006) 『言語と文学の饗宴: 岡田春馬先生帝京大学名誉教授就任記念論文集』 東京: DTP 出版.

Nomura, Tadao (2006) *ModalP and Subjunctive Present*. Tokyo: Hituzi Syobo.

鈴木雅光 (2000) 『例外の文法』 東京: 東京精文館.

〈編著書収録論文〉

伊藤達也 (2010) 「不定名詞の作用域」 藤田崇夫・鈴木繁幸・松倉信幸 編 『英語と英語教育の眺望』 142-

156. 東京: DTP 出版.

Iwamoto, Noriko (2010) "The Use of Debate in English Writing Class." In Takao Fujita, Shigeyuki Suzuki, and Nobuyuki Matsukura (eds.), *The Future of English Studies*, 8–19. Tokyo: DTP Publishing.

〈学会誌掲載論文〉

松倉信幸 (2007) 「英和辞典における感情を表す過去分詞形容詞の表記」『日本英語英文学』17: 17–26.
Shibuya, Kazuro (2008) "Changes of Motivational Intensity in Learning a Foreign Language: A Study of University Students in Japan." *Studies in English Linguistics and Literature* 18: 1–16.

〈大学紀要掲載論文〉

藤田崇夫 (2003) 「副詞化した albeit」『浜松短期大学研究論集』59: 247–256. 浜松短期大学.

〈月刊誌収録論文〉

野村忠央 (2004) 「仮定法現在節における 〈have・be+not〉 語順再考」『英語青年』149(11): 694–696.
東京: 研究社.
中澤和夫 (1988) 「述詞の位置の前置詞句(1)」(英文法研究の最前線 39) 『英語教育』6月号, 70–72. 東京: 大修館書店.

〈学会プロシーディング収録原稿〉

外池滋生 (2003) 「係助詞に関するいくつかの推測: 文中詞と文末詞の間で」*KLS* 23: 252–260. 関西言語学会.

〈口頭発表〉

土居峻 (2009) 「ケンペル『日本誌』における日本語」日本英語英文学会第 19 回年次大会発表ハンドアウト.

〈書評〉

野村忠央 (2004) 「書評: 秋元実治著『文法化とイディオム化』東京 ひつじ書房 2002 年 vi+267pp.」『近代英語研究』20: 105–115.

〈学位論文〉

Baltin, Mark R. (1978) *Toward a Theory of Movement Rules*. Doctoral dissertation, MIT.
Murakami, Madoka (1992) "From INFL Features to V Movement: The Subjunctive in English." Master's thesis, University of Hawai'i at Mānoa.
佐藤雄大 (2012) 『ライティング・プロダクト分析を中心としたダイアログ・ジャーナル・ライティング研究』名古屋大学博士学位論文.

〈オンライン資料〉

American Psychological Association (n.d.) *APA Dictionary of Psychology*. Retrieved July 12, 2022, from <https://dictionary.apa.org/>

文化庁 (2022) 「文化に関する世論調査報告書」 https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/93803201_01.pdf

Grunebaum, Dan (2017, Jan. 2) “Japanese is Affecting the English Lexicon in New Ways.” *The Japan Times*. Retrieved from <https://www.japantimes.co.jp/life/2017/01/02/language/japanese-affecting-english-lexicon-new-ways/>

Oxford English Dictionary Online (n.d.) Retrieved May 30, 2022, from <https://www.oed.com/>

山中伸弥 (2022) 「年代別致死率の推移」『山中伸弥による新型コロナウイルス情報発信』 <https://www.covid19-yamanaka.com/sp/cont1/42.html> (2023年1月10日取得)

※そのサイトやページが、今後更新される可能性が高い場合には取得日を記載する。例えば、*Oxford English Dictionary Online* は、3ヶ月毎に更新される仕様であるため、取得日の表示が必要。更新可能性がわからないものには、取得日を記載しておくことを推奨する。なお、執筆している時点で更新が進んでいるサイトの場合、出版年を確定できないので、n.d.とする。

〈辞書〉

新村出 (2018) 『広辞苑』 (第7版) 東京: 岩波書店.

Stevenson, Angus (2010) *Oxford Dictionary of English*, 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.

※辞書が2冊以内の場合は、他の文献とともに参照文献に含める。奥付に著者表示があるものについては、他の文献と同じ書式とする。但し、下記「辞書」の項目の書式も認める(その場合、書名の頭文字でアルファベット配列に入れ込む)。本文中の引用表示については、(新村 2018: 愛)や(Stevenson 2010: *love*, n.)のように、通常ページ番号を表記するところに見出し語を表示する。

辞書

『ジーニアス英和大辞典』 (2001) 東京: 大修館書店. [G大]

Longman Dictionary of Contemporary English (2014) 6th ed. Harlow: Pearson Education. [LDOCE]

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English (2020) 10th ed. Oxford: Oxford University Press. [OALD]

※辞書が3冊以上ある場合は、「参照文献」の次に「辞書」の項目を作る。この場合、著者を表示する必要はなく、通常書式の著者の位置に書名を移動した書式とする。書名でアルファベット順に並べる。本文中の引用表示については、(G大, *linguistics*)や(OALD, *language*)のように、略称と見出し語を表示する。

Collins English Dictionary (2018) 13th ed. Glasgow: Collins.

『ランダムハウス英和大辞典』 (1993) 第2版. 東京: 小学館.

※書名を省略しない場合は、本文中の引用表示に(*Collins English Dictionary*, *lingua franca*)や(『ランダムハウス英和大辞典』 *linguist*)のように、書名と見出し語を表示する。

コーパス

British National Corpus [BNC]

The Corpus of Contemporary American English [COCA]

The Corpus of American English [COHA]

※コーパスは、本文中に明示していれば末尾に挙げなくても良いが、末尾に挙げる場合には、「参照文献」「辞書」の後に項目を作る。この場合、コーパス名をアルファベット順に並べる。本文中の引用表示では、コーパス名(略称)と引用元を特定できるファイル番号や行番号などを表示する。

附 則

この細則は、『日本英語英文学』第 33 号より適用する。 ■